

2017/07/16 先週のメッセージ

「ヨブ記から学ぶ」

イエス・キリストが十字架に架かれたのは、私達の罪を背負うためです。自分の罪に気づかなければ、十字架の言葉を信じることはできません。罪とは何かを知り、十字架の言葉を食べるとはどのようなことかを学びましょう。

- 患難

ウツの地にヨブという名の人があった。この人は潔白で正しく、神を恐れ、悪から遠ざかっていた。(ヨブ記 1:1)

神を恐れて正しく生きていたヨブは、神を信じるクリスチャンを表しています。

ある時、悪魔は神様に、「ヨブが正しいのは、神が守っているからだ。もしそれをやめたら、ヨブはつぶやくだろう。」と言ってきました。そこで、神様は、悪魔がヨブを患難に遭わせることをお許しになりました。

主はサタンに仰せられた。「では、彼のすべての持ち物をおまえの手に任せよう。ただ彼の身に手を伸ばしてはならない。」そこで、サタンは主の前から出て行った。(ヨブ記 1:12)

ここで注意すべきことは、患難は悪魔の仕業であるということです。このことを正しく理解しておかないと、私達は患難に対して、間違った対応をしてしまいます。患難・試練は、神様が与えるものではありません。しかし、神様は、それを神の栄光が現れる時に変えてくださいます。

現在私達が遭う患難の原因はすべて、悪魔の仕業によって人類に入り込んだ死が原因です。死とは、神との結びつきを失うことです。それは、悪魔がエバを欺いたことによって、もたらされました。その結果、人は神に愛されていることがわからなくなり、自分の価値がわからなくなりました。また、永遠なる神との結びつきを失ったため、人は滅びる存在となり、この世界も滅びるものになりました。自分の価値がわからない不安と滅びる不安から逃れたいと願って、人は名誉や富に敏感に反応するようになりました。これが罪です。すべての患難は、この罪によって、引き起こされています。病の痛みも、自然災害も、争いも、神との関わりを失ったことが原因です。それはもともと悪魔の仕業によるものだったということです。

- 悪魔はヨブに何をしたのか

悪魔はヨブに対して、しもべ達が死に、財産を失い、子ども達が死ぬという患難を与えま

した。死が支配するこの世界で、私達はいつこのような患難に遭うかわかりません。ヨブは、それでも神様に感謝しました。

このとき、ヨブは立ち上がり、その上着を引き裂き、頭をそり、地にひれ伏して礼拝し、そして言った。「私は裸で母の胎から出て来た。また、裸で私はかしこに帰ろう。主は与え、主は取られる。主の御名はほむべきかな。」ヨブはこのようになっても罪を犯さず、神に愚痴をこぼさなかった。(ヨブ記 1:20-21)

さらなる患難がヨブを襲い、ヨブの全身にひどい腫れ物ができた時も、ヨブの妻はつぶやきますが、ヨブはつぶやきませんでした。

すると彼の妻が彼に言った。「それでもなお、あなたは自分の誠実を堅く保つのですか。神をのろって死になさい。」しかし、彼は彼女に言った。「あなたは愚かな女が言うようなことを言っている。私たちは幸いを神から受けるのだから、わざわいをも受けなければならないではないか。」ヨブはこのようになっても、罪を犯すようなことを口にしなかった。(ヨブ記 2:9-10)

患難にぶつかった時、神を信頼するか、つぶやくか、二つの選択肢があります。どんな状態になっても、神を見上げて信頼するなら、神は患難を必ず栄光に変えることができます。しかし、つぶやくなら、患難はただの悲しみで終わってしまいます。ヨブはこのような患難に出会っても、決してつぶやかず、神は栄光に変えてくださることを信じました。

● ヨブのつぶやき

こうして、彼らは彼とともに七日七夜、地にすわっていたが、だれも一言も彼に話しかけなかった。彼の痛みがあまりにもひどいを見たからである。その後、ヨブは口を開いて自分の生まれた日をのろった。(ヨブ記 2:13-3:1)

ある日、ヨブの友人達が見舞いにきましたが、ヨブの病気はさらに悪化していました。この時、ついにヨブは神に対してつぶやき始めました。自分の生まれた日をのろうとは、自分を造った神様に文句を言うのと同じことです。

私達はつらい時、自分は悪くない、被害者だと言って、周囲の同情を引き、人の歓心を買って、人の中に自分の居場所を確保しようとしてしまいがちです。これが罪です。つぶやくとは、自分は正しいという主張です。「自分を正しいとする思い」こそ、罪の正体です。聖書が教えている罪とは、神との関わりにおけるものであり、世の中で使っている意味とはまったく異なります。罪とは、神を求めないこと・拒否することです。それは自分を正しいとすることなのです。

見よ。神が私を殺しても、私は神を待ち望み、なおも、私の道を神の前に主張しよう。神もまた、私の救いとなってくださる。神を敬わない者は、神の前に出ることができないからだ。……私の不義と罪とはどれほどでしょうか。私のそむきの罪と咎とを私に知らせてください。(ヨブ 13:15-23)

ヨブは、もし私に罪があるなら教えてくれと言ってまで、自分の正しさを主張しました。

イエス・キリストの十字架とは、罪人を招き、罪人が神のもとに帰るためのものです。罪人でなければ、神を知ることができません。自分を正しいとする限り、私達は神を必要としません。ですから、自分を正しいとすることが、罪の正体なのです。

ようやくヨブの中に潜んでいた罪が表に表われてきました。神様は、これを待って、ここまで静観しておられたのです。ついに神様はヨブに語り始めました。

● 神の語りかけ

聞け。私はあなたに答える。このことでああなたは正しくない。神は人よりも偉大だからである。なぜ、あなたは神と言い争うのか。自分のことばに神がいちいち答えてくださらないと。神はある方法で語られ、また、ほかの方法で語られるが、人はそれに気づかない。(ヨブ記 33:12-14)

神様は、まずヨブの友達エリフに語らせました。エリフは、ヨブが祈っても神が答えてくださらないと言って神と言い争おうとしているが、それは全く正しくない、神は答えているのに人が気づいていないだけだと指摘しました。

自分は正しいとする主張は、神の愛と完全に対立しています。自分は正しいと主張する人は、神を求めず、人を裁きます。この時は、自分の罪に気づくことができなかったヨブですが、神様に次のように語られて初めて、ヨブは、自分は正しいと言って神につぶやいたことが罪だと気づきました。

わたしが地の基を定めたとき、あなたはどこにいたのか。あなたに悟ることができるなら、告げてみよ。(ヨブ記 38:4)

非難する者が全能者と争おうとするのか。神を責める者は、それを言いたててみよ。(ヨブ記 40:2)

ヨブは主に答えて言った。「ああ、私はつまらない者です。あなたに何と口答えできましょう。私はただ手を口に当てるばかりです。一度、私は語りましたが、もう口答えしません。二度と、私はくり返しません。」(ヨブ記 40:3-5)

それで私は自分をさげすみ、ちりと灰の中で悔いています。(ヨブ記 42:6)

こうして、ヨブは初めて、私を助けてほしいと神に求めました。これが悔い改めであり、十字架の愛を食べることなのです。十字架の愛は、「それでも私はあなたを愛している」と、罪人を救う愛です。自らが罪人であることに気づき、神様にあわれみを求めることこそ、

神が待ち望んでいたことなのです。

● 神に立ち返る

ヨブがその友人たちのために祈ったとき、主はヨブの繁栄を元どおりにされた。主はヨブの所有物もすべて二倍に増された。こうして彼のすべての兄弟、すべての姉妹、それに以前のすべての知人は、彼のところに来て、彼の家で彼とともに食事をした。そして彼をいたわり、主が彼の上にもたらしたすべてのわざわいについて、彼を慰めた。彼らはめいめい一ケシタと金の輪一つずつを彼に与えた。主はヨブの前の半生よりあとの半生をもっと祝福された。(ヨブ記 42:10-12)

放蕩息子が父のもとに帰ってきたときに、盛大な宴会が催されたように、神様はヨブの人生を大いに祝福しました。ここに、ヨブが戻ってきたことに対する神様の喜びが表されています。この世に生きていて、自分が苦しい時こそ、自分の正しさを主張して神を拒否しようとしてしまいますが、神様は、あなたが必要としているのは神だと気づかせようとしています。

見よ。神はこれらすべてのことを、二度も三度も人に行われ、人のたましいをよみの穴から引き戻し、いのちの光で照らされる。(ヨブ記 33:29-30)

私達が患難にぶつかる時、神様は、私達自身が罪に気づき、神様に助けを求めるようにと、患難を静観なさいます。神様に助けを求めなければ平安を手にすることができず、そのためには、どうしても自分は罪人だと気づくことが必要だからです。クリスチャン生活は、このことの繰り返しです。自分の罪に気づき、それでも神は私を愛していると気づくこと、これが十字架の言葉を食べるということです。それが私達の中から不安を取り除き、勇気を与えます。

患難は、決して神がもたらすものではありませんから、神の罰として甘んじて受けようなどと間違った対応をしてはいけません。聖書が患難を喜び、感謝せよと教えているのは、あなたが自分の罪に気づいて神の愛を受け取ることが、真の平安であり、神の栄光の現れだからです。